

上前編



思い  
揺らぐ

生せんぷいんと

第4回



また一軒、家が消えた。

その空間には地ならしされていない黄土色の地面が広がっている。五月の風が、かすかに砂埃すなぼこりを立てた。

ここ、何があったつけ。龍とふるは思い出そうとする。家があったことは間違いない。だが、どんな家だったか覚えていない。

周囲を見回した。すでに歩き慣れてきた名古屋駅西の風景が、そこにある。だがもし、今見えている建物のひとつが一晩で消えてしまったとしたら、そこに何があったのか思い出すことができるだろうか。無理だ。現に今、消えてしまった家の姿を思い起こすことができないでいる。

不思議だな、と思った。記憶とはこんなにも頼りないものなんだ。なくなってしまうと、忘れられてしまう。

いずれリニア新幹線の駅ができて駅西の再開発

が本格的に実行されたら、この町並みも消えてしまふだろう。そして新しくできた建物や施設に記憶はあっさり<sup>と</sup>塗り替えられ、こんな雰囲気のお店街があったことなんてすぐに忘れられてしまう。そして、ひとも。ここに住んでいたひと。商売をしていたひと。この風景が好きだったひと。みんないなくなつて、忘れ去られる。

ふっ、と息を吐いた。柄にもなく感傷的になっている自分を嗤<sup>わら</sup>いたくなる。こんな気持ちになるのは、自分こそが消えていく人間のひとりだと思つているからだろうか。ここにいるのは、たまたま祖父母の家に下宿して大学に通う一時期だけのことだ。すぐに忘れる。

そして、忘れられる。

シオルダーバッグを抱え直し、龍は歩きだした。今日は過ぎしやすい。もう少し歩けばよかつたと思う。

喫茶ユトリロのドアを開くと、いつもどおりコーヒ<sup>にお</sup>の香ばしい匂いが出迎えてくれた。

「お帰り。早かつたね」

敦子あつこが声をかけてきた。

「うん、すぐに目当ての本が見つかったから」

「ほうかね。お昼、食べる？ 何がいい？」

「じゃあ、インディアンスパゲッティ」

「はいはい。お父さん、聞こえとる？」

敦子が呼びかけると、キッチンからかすかな声が聞こえた。正直まことなおが返答したらしい。

龍は空いている席に腰を下ろした。ランチどきを過ぎて客は少ない。一階には他にひとり、男性がコーヒーを飲んでいるだけだった。

敦子が持ってきてくれたコップの水を一息に飲み、ちよつと噎むせる。

「ほら、気をつけなかに」

即座に敦子の声が飛んだ。龍はおしぼりくちもとで口許くちもとを押さえて咳せき込む。

「大丈夫かね？」

敦子が声をかけてきた。

「……うん」

やっと息を整え、返事をする。敦子が向かいの席に座った。

「あんた、最近、おかしい？」

「え？ 別におかしくなんかないけど」

「ほうかね？ なんか心ここにあらずみただけ  
ど」

「そんなことないって。大学だってちゃんと行けるし」

余計なことを言ってしまったな、と後悔する。

別に祖母は大学のことを気にしているわけでもないのに。

「あんた、もしかして、あのことを気にしとらん？」

「あのこと？」

「そのうちここを閉めんならんこと」

「あ、いや……それは……」

思いもよらないことを言われ、返事が滞った。

「あんたが気にしなかんことでないからね。この店はまあ、長いことやっとるけど、時代が時代だ  
で」

そう言って敦子は笑みを見せた。

「ここですつと暮らして、店に出て、お父さんと

結婚して子供を産んで、いろいろあったけど最後にここを離れなカンことになるとは思わなかったけどね」

気にしているのは祖母ちゃんばあのほうじゃん、と思った。口には出さなかったが。その代わりに尋ねた。

「具体的に決まったの？ 閉店の日程とか」

「そんなの、全然決まっとらんよ。まだなあんにも決めとらん」

「なんだ、てっきり決まったから俺おれに話すんだと思った」

「そうじゃなくてねえ、先々のことは考えんといかんかなって」

またキッチンから声こゑがする。敦子は立ち上がり、できあがったスパゲッティを受け取って龍の前に置いた。

「熱いで気をつけやあよ」

焼けた鉄皿の上に炒いためたスパゲッティを載せ、その上にカレーをかける。これが名古屋めしのひとつであるインディアンスパゲッティだ。ユトリ

口ではカレールーをかけるが、店によってはスパゲッティをカレー粉で炒めるタイプのものもあるらしい。鉄板ナポリタンと同じように溶き玉子が敷かれ、鉄皿でじゅうじゅうと音を立てているのもユトリ口のやりかただった。

その半熟玉子と一緒にスパゲッティをフォークで巻き取り、ふうふう吹いてから口に入れる。熱々のスパゲッティにカレーの辛味と香り、そして玉子のまるやかな味が合わさって、すこぶる美味い。龍は時折水で口の中を冷ましながら食べ進めた。たちまちのうちに完食する。紙ナプキンで口許を拭き、一息ついた。

「すみません」

声をかけられた。顔を上げると、奥の席に座っていた客だった。年齢は四十歳前後といったところだろうか、面長で見たことのない顔だった。着古して形の崩れたグレイのジャケットを着ている。「あの、もしかして鏡味龍さんですか」

「あ、はい。そうですけど……」

返事をしながら龍は考える。どこかで会ったひ

とだろうか。まったく覚えがないのだが。

その男性は先程まで敦子が座っていた向かいの席に腰を下ろし、言った。

「私、あなたのファンなんです」

「……へ？」

思わず変な声が出た。ファン？ ファンって何？

「『DAGANE!』の連載、読んでるんですよ。

『名古屋めし再発見』」

「ああ……」

なるほど、あの企画を読んでいるひとか。

「たまたま初めての喫茶店に入ってみたら、そこに有名人がいるなんて。驚きです」

「有名人だなんて、そんな」

「いやいや、ご謙遜けんそんご謙遜。あの連載は鏡味さんがいなければ成立しませんからね。美味おいしいものを食べているときの、本当に美味しそうにしている表情とか。今も拝見して、やっぱりいい表情だなと思いました」

「いや……」



頬ほおが火照ってきた。面と向かって言われると、無性に恥はずかしい。

「この前のおこしもんの特集もよかったです。じつは我が家にも昔、おこしもんの型があつたんですよ。妹がいましてね、雛ひな祭りのときには母親がおこしもんを作ってくれました。その頃ころのことを思い出して、懐なかしくなりましたよ」

男性は勢い込んで話しかけてくる。龍はただ「はあ」とか「ええ」とか相槌あいづちを打つことしかできなかつた。

「鏡味さんは医学生なんですよね。あの企画に出演されることになったきっかけは何ですか。やっぱりオーディションとかですか」

「いえ、たまたま編集者の方とお会いする機会があつて、そのときに誘よわれたんです」

「なんと、スカウトですか。そりゃすごい。芸能人みたいだ」

「いえ、スカウトだなんてそんな大層なことじゃなくて——」

「それで、あなたを見出みいだしたのが『DAGAN

E!』の平野里央ひらのりおという編集者なんですね?」

「ええ、そうです」

「そのひと、どんな方なんですか」

「どんなって、若い女性で、結構有能なひとですけど」

「有能ですか。自分で企画を立てて仕事を進めていくような?」

「まあ、そんな感じでしょうか」

「なるほど。でも、ああいう小さな会社だと、そういう意欲的な人間って軋轢あつれきを生んだりしませんかね? 周囲とトラブったりとか」

「それは、どうなんでしょうかねえ」

「そういうとき、その方はちゃんと周囲に気配りしながら仕事を進めることができるタイプでしょうか」

「うーん……」

龍は唸うなった。これまで里央と接してきた印象からすると、気配りというのとはできなそうな気がする。むしろ軋轢を生みそうだ。しかしそんなことを初対面のひとに話すわけにもいかない。

「そういう仕事のことまでは、よくわからないです。俺は取材のときだけの付き合いなんです」

「適当に誤魔化した。」

「なるほど。よくわかります」

男性は頷く。

「じゃあプライベートで平野さんと接触するようなことはないんですか。取材抜きで食事をしたりとか」

「それは……」

龍は口籠もった。この前、一緒に夕飯を食べたことはある。しかしそんなことまで話さなくてはならないのか。いや、そもそもどうしてこのひとは、そんなことまで訊いてくるんだ？

「ところで、あなたは——」

誰ですか、と尋ねようとするのを、

「いや、面白い話をありがとうございます。ではまた」

龍の言葉を遮り、勝手に礼を言ってコーヒー代を払うと、男性はさっさと店を出ていった。

「なんか、変なひとだねえ」

敦子が龍の気持ちを代弁するように言った。

と、キッチンにいた正直が出てきた。

「嘘だ<sup>うそ</sup>」

「え？ 嘘って何が？」

敦子が訊き返すと、

「あいつ、奥の席で入口をずっと見ていた。誰かと待ち合わせているんだと思ったんだが、龍が帰ってくると今度は龍ばかり気にしていた。そして龍がスパゲッティを食べ終わるのを待って話しかけた」

「つまりそれって、あのひとが最初から俺と話をするのが目的だったってこと？」

「龍が言うのと、正直は頷く。」

「恐らく、そうだろう」

「でも、どうして？」

「あんたのファンだって言っとったがね。それで会いに来たんじゃない？」

敦子が言ったが、龍は納得できなかった。

「俺、『DAGANE!』では顔と名前は出してるけど、住所まで公表はしてないよ」

「それでも、プロなら調べられるかもしれん」

正直が言う。

「プロって？」

「探偵だ」

「探偵って、そんな……どうして？」

祖父の言葉に、龍は戸惑う。どうして自分が探偵に調べられなければならないのか。が、そのとき、ふと気付いた。

「あのひと、俺のことより平野さんのことを知ってたがってたみたいだった。もし探偵だったとしたら、調査対象は俺じゃなくて、平野さんかも」

「ああ、そういうえば昔、そんなことがあったねえ」

敦子が思い出したように、

「近所の娘さんに縁談が持ち上がってねえ、それで興信所のひとがうちに来て、あれこれ評判を訊いてったんだわ。そんなときにそっくりだて、あの感じ」

「へえ……」

「平野さんとこの娘さん、縁談があるんかねえ」

敦子は楽しそうに言った。他人であっても縁談とかそういう話は楽しいらしい。

龍は、つぷや呟いた。

「でも……どうして俺なんだ？」

「え？ どうしてって、何がですか」

訊き返されて、我に返る。

「あ……何でもないです。こっちの話」

ついうっかり思っていたことを口にしてしまったらしい。どきまぎする龍に、里央は訝いぶかしそうな視線を向けた。

「鏡味さん、心ここにあらずって感じですけど。

何かありました？」

「いや、特に何も」

言ってから、ちょっと素っ気なさ過ぎたかなと思つた。案の定、里央の疑わしげな表情は変わらない。縁談うんぬん云々のことは絶対に言わないほうがいいな、と龍は思つた。

ふたりは今日も名古屋駅西にあるエスカ地下街の喫茶リッチで打ち合わせをしている。龍の前にはアイスコーヒー、里央の前にはオレンジジュースが置かれていた。

「それで、次の名古屋めしですけど、何にします?。」

話題を変えるために訊いてみた。

「それ、今日決めたかったことなんですよ」

里央も話に乗ってくる。

「鏡味さん、何がいいですか」

「そうですね……あの、前から考えてたものがあるんですけど」

「何でしょう?。」

「ひつまぶし、なんかどうですか。名古屋めしとしては有名なものだし……」

続きを言おうとして言葉が途切れる。里央の表情がまたまた厳しくなったからだ。

「……あ、やっぱり駄目ですか。そうですね。」

ひつまぶしって今更取り上げるには有名すぎるし、それにちょっと高いし」

「そういう問題じゃないです」

里央が硬い口調で言った。

「ひつまぶしには、問題があります」

「問題って?。」



「鏡味さん、最近のニュースを聞いてませんか。

今、鰻うなぎは絶滅寸前なんですよ」

「ああ、そういえば漁獲量が減ってるって言うってたかな」

「減ってるどころの騒ぎじゃありません。このままだと鰻が地球から姿を消してしまいうんです」

里央が身を乗り出す。

「ニホンウナギなんて絶滅の恐れがある生物としてレッドリストに載ったんですよ。ジャイアントパンダやトキ並みに貴重な生き物なんです。なのにまだに蒲焼かばやきにされてスーパーとかで売られてるんですよ。信じられますか？」

「はあ……」

「近々にワシントン条約で規制がかかるとも言われてます。そうなる取引自体ができなくなりま  
す。まあ、そうなったほうがいいとわたしは思いますけどね」

一氣にまくし立てられた。

「平野さん、鰻が嫌いなんですか」

言ってから、不用意な言葉だと思った。案の定、

里央の表情がさらに険しくなる。

「そういう問題じゃないです！ わたしの好き嫌いなんかじゃなくて、鰻という生物が絶滅するかどうかって話なんですよ」

「あ、はい。ごめんなさい……すみません」

龍はひたすら謝る。

「とにかく、鰻は駄目です。別のものにしましよ  
う」

むっとした表情のまま、里央は言った。

「別のものといっても、俺が知ってるのは一般的に有名なものばかりで、知る人ぞ知るみたいなのはわからないんですよ」

「じゃあ、リクエストはないんですね？」

「はい……ごめんなさい」

なんだかまた謝らなくてはいけないような気がして、頭を下げる。

「しかたないですね」

そう言うとき里央は、いつも抱えているバッグから高島屋のレジ袋を取り出す。

「だったらこれなんか、どうでしょう？」

袋から出てきたのはビニールパッケージされた長方形の平たいものだった。茶色、白、茶色と三つに分かれていて、パッケージには「蜂蜜生せんべい」と書かれている。持ってみると感触は柔らかい。

「生せんべい、ですか。これも名古屋名物なんですか」

「同じ愛知県の半田市の総本家田中屋というメーカーが作っている和菓子です。名古屋でも昔から普通に食べられています」

「へえ」

「早速、食べてみますか」

「ええ。じゃあまたユトリロに行きましょうか」

と言うと、

「いえ、今回は野外で撮影しましょう。そうですね、セントラルタワーズ二階のテラスあたりで食べるところを撮りましょう」

と里央が答える。

「え？ でも、じゃあどこで焼くんですか」

龍が尋ねると、彼女はきよとんとした顔になり、

「え？ 焼く？」

「え？」

「え？」

と、ふたりで「え？」を繰り返した。龍は軌道修正して、

「だから、焼かないと食べられないでしょ？」

「何が？」

「生せんべいですよ」

「え？ 何言ってるんですか。焼きませんよ。そのまま食べるんです」

「そのまま？」

今度は龍が驚く。すると里央は合点したように、「ああ、よくある勘違いです。生せんべいって名前だけど、これはそのまま食べるお菓子なんですよ」

「あ、そうなんですか」

ちよつと恥ずかしくなった。でも、「生」って書いてるからなあ。

「じゃ、早速行きましょう」

里央が立ち上がったので、龍は残っていたアイ

スコピーを急いで飲み干し、後についていった。エスカ地下街のエスカレーターを上がり、名古屋駅のコンコースを歩く。今日も人通りが多く、うっかりしていると反対側から来るひとに当たりそうになる。

「あ、すみません」

危うく肩に当たりそうになり、擦れ違ったひとに謝る。しかしそのひとはすでに歩き去っていた。「……ん？」

思わず立ち止まる。擦れ違うとき視界に入ってきた人間が龍の記憶中枢を刺激したのだ。

「どうかしたんですか」

里央が訊いてくる。

「あ、いえ」

誤魔化して歩きだす。あのひと、たしか……。あ、と声をあげそうになった。が、里央に気付かれないよう我慢する。思い出したのだ。

あの男。ユトリロに来て里央のことをいろいろ聞き出そうとした、あの男だ。

一瞬だったが、こちらを見ていたような気がする

る。もしかして監視しているのだろうか。いよいよ怪しい。

先に行く里央の後ろ姿に問いかけてみたかった。あのひと知ってますか、と。しかしなぜか、ためらわれた。本当に里央に関係する人物なのかどうか、確証が持てない。それに正直が言うようにプロの探偵だったとしたら、里央も彼の顔は知らないだろう。探偵に調べられるようなことがあるのか、と尋ねるわけにもいかないし。結局龍は黙ったまま歩き続けた。

さへくらしおひ  
桜通 口近くの大きなエスカレーターで二階へ。そのまま真まっ直すぐ外に出れば、タワーズのテラスだった。結構な広さがあるわりに、コンコースほどの人込みはない。たしかにここなら落ち着いて撮影ができるだろう。

里央の指示で階段に腰を下ろし、そこで生せんべいを食べることにした。

「両端は黒糖味で、真ん中の白いところは上白糖味だそうですね」

フィルムを剥はがし、端の黒いところを食べてみ

る。

少し弾力のある食感。これはいろいろか、この前食べたおこしものに似ている。名古屋のひとは、こういうのが好きなのだろうか。俺も好きだけど、すぐに黒糖味を食べ終え、白い部分に取りかかる。こちらを食べてみると、たしかに黒いほうが黒糖味だったことがわかる。白いほうが淡白な甘味があった。なんか、美味しい。

上白糖味も食べ終え、残る黒糖味に取りかかるうとしたとき、

「ちょっと待ってください」

里央が止めた。

「生せんべいには秘密がひとつあります。それを撮りたいんです」

「秘密？」

「と言っても昔から食べてる人間にとっては常識なんですけどね。それ、一枚のように見えますけど、じつは三枚が重ねられているんですよ。剝がしてみてください」

言われたとおりにしてみると、たしかに三層に

なっていて、薄く剥がれる。

「なんか面白いですね」

龍が生せんべいを剥がす様を、里央は写真に撮り続けた。

「子供だったらこういうの、剥がして食べるだろうなあ」

剥がした生せんべいを食べてみる。当然だが薄くなっただけで味は変わらない。でもこういうちよつとした遊びができるというのは楽しい。

「はい、いいのが撮れました」

里央がにっこりと微笑んだ。

「ありがとうございます。これでOKです」

「あ、今回はこれでいいんですか」

「はい。あとは生せんべいの由来とかをまとめて、ちやちやつと作っておきますから」

「あ、はあ」

表情は明るいが、どこか熱意のない言いかただと思つた。里央はこの企画に並々ならない意気込みを持っていたと思つていたのだが。

「あの、平野さん、間違つたらごめんなさいで



すけど……」

「何ですか」

「もしかして生せんべいにもあんまり乗り気じゃないんですか」

尋ねられた里央が、はっとした表情になる。

「そんなことは……でも、どうしてそう思ったんです?」

「いや、なんか、そんな気がして……すみませ  
ん」

「謝らなくてもいいです。たしかに……うん、そ  
ういうところもあるかな」

「生せんべい、嫌いなんですか」

「大好きです。子供の頃からよく食べてました。  
今でもときどき食べます」

「じゃあ、どうして?」

「気に入らないのは、由来です」

「由来?」

「じつは生せんべいって徳川家康とくがわいえやすの好物だったん  
です」

里央は意外な名前を口にした。徳川家康? あ

の？

「桶狭間おけはざまの戦いで家康は……あ、当時は松平まつだいらもと元康やすって名前でしたっけ。ともかく彼は今川いまがわよしもと義元の側そばに付いてたんです。まあ幼少の頃から今川氏の人質にんしつだったので当然のことでしょうし、多勢たせいの今川が無勢むせいの織田おだに負けるとも思ってたなかつたんでしようけどね。しかし結果は織田軍の大勝。義元が討たれて今川軍は敗退ばいたいします。元康も母親おとがいる今の知多ちたあたりに逃れてきました。さらに母親の妹が嫁いでいる現在の半田市あたりまで落ちのびてきたんですが、その頃には疲労と空腹で相当疲弊ひんぱいしてたそうです」

里央とうとうは滔々とうとうと語る。龍は相槌さうちを入れる間も与えられなかった。

「へろへろだった元康は、そこである百姓家の庭先に干されたせんべいを見つけました。早速それを所望しょうぼうしたんですけど、その百姓の家の娘はこのせんべいはまだ生だからと断りました。しかし腹ぺこだった元康は『それでもいいから』と頼み込んで食べちゃったんです。それがとても美味しか

ったので、元康は半田に滞在中は生のせんべいを届けるようにと所望したんだそうです」

「それで生せんべいと家康が繋がるんですね」  
やっと口をはさめた。

「でも、その由来がどうして気に入らないんですか」

「続きがあるんですよ。生せんべいを所望された百姓家の娘は、献上のために城を訪れるたびに顔を合わせる元康に対して恋心を抱いてしまうんです。それで元康が三河みかわに戻るために半田を立った後、池に身を投げてしまいました。どう思います?」

「どうって……その娘さんはなぜ身を投げたんでしょうか。よくわからないんだけど」

「だから、身分違いの恋をしてしまって打ち明けられることもできなくて、どうにもならなくなつて自殺したんですよ」

「なるほど。それはちょっと悲しい話ですね。当時の身分制度からすると、そういうこともあるかもしれないけど、そういう時代だからって——」

「違うんです。わたしが気に入らないのは身分制度云々じゃないんです。自殺した娘が許せないんですよ」

里央が言った。

「だってそうでしょ。勝手に好きになって勝手に失恋して勝手に自殺したんですよ。ほんとに勝手だと思いませんか」

里央は「勝手」を連発する。

「わたし、こういう『悲劇のヒロイン』っぽいことをする女って嫌いなんです。自分に酔ってるっていうか、自己完結しちゃってるっていうか。そう思いませんか？」

「いや、うーん……」

龍は口籠もる。

「じつはわたしの知り合いにもいるんですよ。ずっと片思いをしていた相手とやっと結婚できたのに、その男に浮気されて結局離婚しちゃったひとが。そのひとはずっと自分のことを不幸だ不幸だって言いつづけてるんです。でもそんなの、最初に好きになった自分のほうにも責任があるじゃない

いですか。ある意味、自業自得ですよ。そう思いませんか」

「いや、それは……どうかなあ」

龍は言葉を選びながら言う。

「ひとにはそれぞれ事情があるから、一概に良いとか悪いとか言えないんじゃないでしょうか。こちらが思っているモラルを基準に判定はできないと思うんですよ。戦国時代の家康に恋した女性はもちろん、その離婚した女性についても」

「そうでしょうか」

里央は納得できないというような顔をする。

「それより不思議に思うのは、どうして平野さんが他人の恋愛についてそんなに感情移入するのかってことです」

「感情移入なんか、してませんけど」

「……あ、そうですね。ごめんなさい。感情移入という言葉は間違っていました。平野さんは怒ってるんですよね。そして裁いている」

「裁いてなんかもいませんけど」

「いえ、それは間違っていないと思います。平野さ

んは話に出てきた女性ふたりを自分の倫理観を基準にして有罪だと言っている。しかもその倫理観の後ろには怒りがある」

「……ずいぶんと、はっきり言いますね」

「ごめんなさい。でも平野さんと話すときには、はっきり言ったほうがいいんだと思ったので」

「それは、わたしが言わないとわからない人間だということですか」

里央がさらに突っかかってくる。しかし龍は怯ひるまずに言った。

「誰だって、言われないとわからないものだと思いますよ。以心伝心とかって、たぶん嘘です。それにこれは、僕のためでもある。平野さんに言われればなしだと、後で僕、すごく落ち込むんです。ああ言えばよかった。こう話せばよかったって。これまで何度もそういうことがありました。だからこれからは、思ったことを言おうって」

里央は少し沈黙していた。やはり火に油を注いでしまったのだろうか、と龍は危惧きぐする。が、彼女は不意に息をついて、

「……わたし、そんなに鏡味さんに負担をかけちゃってたんですか。よくないですね。すみません」

と、頭を下げた。

「でも、そうやってはつきりと言ってくれたの、鏡味さんだけです。たぶんみんな、黙ってるんでしょうね」

「みんな？」

「仕事仲間とか。上司とかにもこんな感じで当たってるし。きつと嫌な奴やつだと思われてるんだろうなあ。しかたないけど」

と、里央は苦笑を浮かべた。

「はつきり言って、もう萌え系のゲームは時代遅れですよ」

のぶたか  
宣隆の声は店内に響いた。

「これからは『萌え』ではなく『燃え』、つまり情熱です。パッションです。プレイヤーが熱く燃え上がるようなゲームこそが覇権を握るんです。たとえばうちの『アルカイツク・サーガ』みたいな。わかります?」

「はあ、はい」

問いかけられた男性は曖昧あいまいに頷く。

「うちのゲームはそんなじよそこのスマホゲームとは格が違います。ゲーム・システムの斬新ざんしんさ、世界観構築の完成度、プレイヤーに優しい課金システム、どれをとっても最高級のもです。これが世界的に認知されれば、テレビでCM流しているようなスマホゲームなんてみんな駆逐くそくされますよ。それくらいのパクトはあります」



「な……るほど。それはすごいですねえ」

男性は追従笑いを浮かべて、

「それでなんですけど、鏡味さんのそのコスプレ……コスプレって言ったらいいか、その扮装ふんそうですが、どういう意図で？」

「だから言ってるじゃないですか。『アルカイック・サーガ』は世界の基準を変えるんです。そのため『think different』なんです。だからこそステイブ・ジョブズなんですよ」

そう言っただけで宣隆は、顎あごの下に手を持っていく。自慢のジョブズ・ポーズだ。

「は、はあ……」

男性は言葉も出ないようだ。その様子を見て龍はそっと笑いをこらえた。

宣隆が熱弁をふるっている相手は新聞記者だった。ステイブ・ジョブズそっくりの日本人がおかしなことをする動画がSNSで流行はやっているというので、当の本人取材に来たという。だから彼の目的はジョブズのそっくりさんである宣隆の人となり動画を始めた動機などを聞くことだった。

た。しかし宣隆はこれ幸いとばかりに自分が関わっているスマホゲームのプレゼンを始めてしまったのだ。

「最も重要なのは、このゲームのシナリオを私、鏡味宣隆がひとりで作り上げたということですよ」

宣隆はなおも熱弁をふるう。

「もちろん世界観やキャラクターの設定にも関与しています。私の監修による全体の統一感こそが、ゲームを魅力的なものにしているんですよ」

よくもまあ、これだけ自画自賛できるものだな、と龍は半ば呆れる。

「宣隆ちゃん、立派に話しとるねえ」

龍の気持ちを代弁したのは、宣隆たちの隣、いつもの自分たちの定席に座っていた岡田美和子だった。

「なんか偉いさんみたいだがね。子供の頃はよく喋らんでもじもじしとったのに」

「おばさん、そういう昔の話は……」

今度は宣隆がまごつく。しかし美和子は気付かない様子で、

「敦子さん、ほれ、小学校のとき、宣隆ちゃんが運動会で応援団することになって、でも人前で声が出せずに泣いとしたことあったでしょお？ あおのときは『男の子だで、しっかりしやあ』って言ったつたのに大泣きに泣いてねえ」

「ああ、そういうこともあったねえ」

敦子は頷く。

「でもねえ、この子もあれから頑張って人前でも話せるようになったんだわ。そういうところも見たってちよおよ」

くすつ、と新聞記者が笑いを洩<sup>も</sup>らした。それまで滔々と喋っていた宣隆が今度は顔を赤くした。

「もう、いらんこと喋らんでよ」

記者が帰った後、宣隆が文句を言った。しかし敦子はしれっとした顔で、

「あんたの本性を知つとる者がおるところで虚勢を張るのがいかんのだわ」

と言った。

「ほだに。あんたが幼稚園でおしっこ洩らしたことを喋らんかっただけ、ありがたいと思わな」

美和子も加勢する。

「なんでおばさんが俺のそういうこと知ってるんだよ？」

「長い付き合いだで、何だって知つとるわ。ねえ？」

と、これまで無言だった夫の栄一えいいちに同意を求め、しかし彼は上目遣いに妻の顔を見返すだけで、返事はしなかった。

「そう言えば、あんたも幼稚園では粗相しとったみたいだねえ」

美和子が無言の夫に言った。

「すぐお腹壊なかしてまうで、えらいことになったつて」

「……なんで、そんなことを？」

さすがの栄一も動揺したようだ。

「お義母かあさんに聞いたんだわ。あんたと結婚したばっかのときに」

美和子は自慢げに答える。

「あんたはすぐにお腹を壊すで、気をつけたってちようよって。でも、そんなことなかったよね

え?」

「あれは、子供のときだけだ」

ぶすつとした表情で、栄一が言う。

「大人になったら丈夫になったわ。そんなことま

で、おふくろが話しとるとは、思わなかったな。

おそが  
怖いわ」

「龍、おまえも気をつけろよ」

不意に宣隆が言った。

「え? 俺?」

いきなり流れ弾が飛んできて、龍は困惑する。

「何もかも筒抜けになるからな、ここでは」

「う……」

「龍ちゃんは、しっかりしとるでええわ」

美和子が言う。

「大学もちゃんと通つとるし。今に立派なお医者

さんになるで。ねえ、敦子さん」

「ほだね。そうなるとええね」

敦子が言葉を返す。その口調が少し、気になっ

た。

もしかして、気付かれているのだろうか。

「そういえば龍ちゃん、今度は何食べるの?」

「……え?」

美和子に訊かれ、龍は我に返る。

「ほれ、名古屋の食べ物を紹介するやつ。平野さんのお嬢さんとやつとる仕事」

「あ、ああ、はい。次は生せんべいだそうです」  
龍が答えると、

「生せんべい? あれも名古屋だけのもんかね?」  
美和子が眼を丸くした。

「名古屋っていうか、半田市で作られてるお菓子  
だそうです」

「へえ、知らなかったわ。お父さん、知った  
た?」

向かいの席の夫に尋ねる。すると、

「製造元が半田にあるのは、知ったった」

栄一が答えた。

「でも、このあたりでしか食べられとらんとは知  
らんかった」

「ほうだわねえ。ほんとに他では食べられとらん  
の?」

「少なくとも東京では、見たことがないです」

「へえ。じゃあ京都とかは？ ほれ、生八ツ橋と  
かあるでしょ？」

「生八ツ橋と生せんべいは、違うもんだ」

栄一が突っ込みを入れる。

「でも、懐かしいね。前はよお食べとった」

敦子が言う。

「そういえば最近食べとらんわ。どこにでもある  
もんだで、食べようと思えばいつでも食べられる  
のにねえ」

「だから逆に、食べないんだよ」

宣隆が言った。

「名古屋めしと呼ばれているものの大半は地元の人  
間には普通すぎて、取り立てて食べようと思  
わないものが多いからね。でも……ああ、そう  
か！」

突然、彼は声をあげた。

「次のネタ、それでいこう。ノブタカ・ジヨブズ  
と名古屋めし。何がいいかな。夏に味噌煮込み？  
それとも海老フライ？ やっぱりひつまぶし？

「どうする……?」

独り言を呟きながら、宣隆は鏡味家の私用ドアから店を出ていった。

「ほんと、あの子も変わつとるねえ」

美和子が笑う。敦子も笑った。

「我が子ながら、わたしもそう思うわ」

ひとしきりの笑い声が途絶えた後、

「生せんべいか……」

呟く声があった。栄一だった。

「なにい? 急にしみじみした言いかたして」

「いや……」

妻の問いかけに、少し躊躇ちゆうちよした様子で言葉を濁す。が、思いなおしたように話しはじめた。

「思い出したんだわ。子供の頃のことをよ。あれは俺が十歳くらいだったかなあ、おふくろと親父おやじが生せんべいのことであらい喧嘩けんかしたんだわ」

「喧嘩? なんで?」

「おふくろが生せんべいを焼いてから俺に食べさせたんだわ。それを見て親父が『なにやつとる。生せんべいは焼くもんでないが』って怒ってな」



あ、と龍は思った。自分と同じ勘違いだ。

「で、おふくろが『そんなの知らん』とか言い返して喧嘩になったんだわ。ふたりともひどい剣幕だったで俺がびっくりしてまってな、泣きだしたんだわ。そしたらふたりとも収まったけどもよ」

「お義母さんってたしか、名古屋のひとじゃなかったね？」

「岡山出身だった。だから生せんべいのは知らなかったのかなあ。でもなあ、変なんだわ」

「何が変なの？」

「喧嘩しとるときに親父がおふくろに言ったんだわ。『生せんべいの食いかたくらい、お前だって何度も食べとるから知つとるだろうが』ってな。

たしかに十年以上も名古屋におるから、生せんべいくらい食つとると思うが」

「わたしが初めて会ったときのお義母さん、生粋の名古屋生まれみたいにしとったわねえ」

「名古屋の水が合つとるとか言つて故郷より気に入つとったからな。だで余計に、あのときのこと  
が気になるんだわ」

栄一はそう言うと、アイスコーヒーのストローをくわえた。

龍はその話を聞きながら、里央のことを考えていた。彼女こそ生粋の名古屋人なのに、どこかの街と合わないでいるように感じられる。

いや、この街にということではない。彼女が今いる環境に馴染なじんでいないように見える。

——きつと嫌な奴だと思われてるんだろうなあ。そう言ったときの里央の、どこか諦あきらめているような表情が、脳裏に浮かんだ。